

家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向

諸井 克英

生活科学部・人間生活学科

I. 問題

社会構築主義の観点にたつ Gubrium & Holstein (1997) は、「家族の言説」を分析し、「現在広がっている家族についての懸念」が逆に「家族」の心理的重要性を促進していることを指摘した。本研究では、「家族の言説」の「最新版」(渋谷, 1999)ともいえる「アダルト・チルドレン」概念を実証の対象とする。今やこの概念は、たとえば漫画評論の核としての地位さえ占めている(荷宮, 1997; 磯野, 2002)。最近の全国調査は(国立社会保障・人口問題研究所, 2007)、居住条件と無関係に親族を家族と見なす傾向が進んでいることを示している。つまり、「家族」定義の拡散が生じているのである。このような状況の中で、今や日常概念化した「アダルト・チルドレン」概念と家族機能との関わりを実証的に検討することは、重要な作業といえよう。

「アルコール依存症」の親をもつ家族の中で育った成人を「アダルト・チルドレン」と呼ぶ。この概念は、'70年代の米国で注目されるが、必ずしも「アルコール依存症」家族でなくても、何らかの「トラウマ」をもたらす家族(「機能不全家族」)に埋め込まれた子どもにも一般化されるようになる。Woititz (1983) は、臨床経験に基づいて狭義の「アダルト・チルドレン」概念の体系化を試み、一般人にもこの問題を認識させることに寄与した。わが国でもこの概念は'90年代になるとカウンセリング現場でも広く認知されるようになった(斎藤, 1996; 信田, 1996など)。また、この概念は恋愛関係にも適用され、幼少期の特異な家族体験に起因する「アダルト・チルドレン」症候が、過度な愛情への期待と怖れによって、恋愛関係上の不全をもたらすとされる(Woititz, 1993)。

「アダルト・チルドレン」は、緒方(1996)によれば、

次のようなルールをもつ家族の中で生まれる。①否認〈アルコール依存症を認めなかったり、禁酒の約束が破られてもたまたまであると見なす〉、②硬直性〈暴力などの予測不可能な事態に対し、心を閉じる〉、③沈黙〈飲酒に伴う負の出来事について家族同士でも話さないようにする〉、④孤立〈飲酒に伴う負の出来事が他の人に知られないように、近隣と付き合い合わない〉。

「アダルト・チルドレン」は、そのような家族環境に適応するために、以下のような役割をとる(緒方, 1996)。①家族英雄〈勉強やスポーツに励み、家族が良くみえるようにする〉、②道化者〈家族の中で面白く振る舞い、葛藤を減少させる〉、③なだめ役〈家族の仲介役をとる〉、④犠牲者〈「家族問題」を「子どもの問題」へと転換させるために、問題を起こして自分が問題者となる〉、⑤いなくなった人〈目立たないようにして、注意を自分のほうに引く〉。

Donaldson-Pressman & Pressman (1994) は、自己愛理論に基づいて「アダルト・チルドレン」を産む出す家族を説明した。特異な親子関係が「アダルト・チルドレン」的性格をもつ子どもを再生産するのである。その際、彼らは、次の2タイプの自己愛家族を区別した。①目にみえる自己愛家族〈アルコール、ドラッグ、虐待などによって特徴づけられる親を含む古典的な機能不全家族〉、②隠れた自己愛家族〈外見的には問題症状が発見されにくいけれども、子どもが親の要求に応えるが親に感情的な支えをもたない〉。

要するに、「アダルト・チルドレン」概念は、当該個人が抱える心理学的問題を家族機能の不具合に跡づける点に特徴がある。しかし、家族機能に関する心理学的研究は、この概念とは独立に早'50年代から取り組まれてきた(立木, 1999参照)。その中でも、Olson (Olson, Sprenkle, & Russell, 1979) によって提起された円環モデル(circumplex model)は、膨大な実証的研究をもたらした。Olsonは、過去の家族機能研究を概観し、従来の研究で抽出されている家族機能次元が「絆(cohesion)」と「舵取り(adaptability)」の2次元に整理できることを提起し、

2次元を測る家族機能尺度の開発と洗練化を行った。後に Olson (1986) は「コミュニケーション (communication)」次元も加えた。わが国においても、立木 (1999) をはじめ、Olson の考えを核とした家族機能を測る尺度の作成が試みられている (貞木・榎野・岡田, 1992; 西出, 1993; 茂木, 1994 など)。

そもそも「アダルト・チルドレン」概念は、幼少期に体験する家族関連「トラウマ」に関連して提起された (Woititz, 1983)。先述した Donaldson-Pressman & Pressman (1994) が指摘する「隠れた自己愛家族」の存在は「アダルト・チルドレン」症状の一般化も意味することになる。つまり、Woititz が挙げる「アダルト・チルドレン」の基本的特徴が健常青年にも少なからずあてはまり、彼らが現在抱える家族が果たしている機能の認知と関連するはずである。笹野・塚原 (1998) は、Woititz (1983) がまとめた「アダルト・チルドレン」の13個の特徴をそのまま尺度項目として、家族特徴 (機能不全家族尺度) との関連を看護短期大学女子学生を対象として検討した。両者の間に有意な関連は認められなかったが、この研究は以下の問題点を抱えている。①アダルト・チルドレン尺度の項目にダブル・ワーディングの問題がある、②機能不全家族尺度の項目内容が極端である、③両尺度ともに尺度信頼性の検討が実施されていない。なお、塚原らは、このアダルト・チルドレン尺度を用いてバーンアウト (新山・塚原・笹野, 2005) や対人ストレス (塚原・新山・笹野, 2005) との関連を探っている。

以上のことを踏まえて、本研究は次の2つの目的のために行われた。①一般健常者にも適用可能なアダルト・チルドレン傾向尺度を作成する、②アダルト・チルドレン傾向と家族機能認知との関係を調べる。

II. 方法

調査対象および調査の実施

質問紙調査が、同志社女子大学と神戸松蔭女子学院大学で「社会心理学」関係の講義を受講している学生を対象に実施された (それぞれ、2005年4月11日、4月22日)。後述する3尺度に完全回答した179名 (同志社女子大学133名、神戸松蔭女子学院大学46名) を分析対象とした。回答者の平均年齢は20.26歳 (SD=.50; 20~23歳) であった。

質問紙の構成

質問紙は、回答者の基本的属性に関する設問に加え、①家族機能認知尺度、②アダルト・チルドレン傾向尺度、③

自尊心尺度から構成されている。

1. 家族機能認知尺度

自分を取り巻く家族がどのような状態であると認知しているかを測定するために、杉浦 (1998) が作成した家族機能認知尺度を利用した。杉浦は、Olson の家族機能認知の3次元の考えに基づき、わが国の先行研究 (貞木・榎野・岡田, 1992; 西出, 1993; 茂木, 1994; 立木, 1999) で用いられている尺度の項目を整理した。Olson が見出した「家族の絆」、「家族の舵取り」、「コミュニケーション」の3次元に従って、項目を整理・統合しながら、表現の修正を行った。最終的に51項目から成る尺度を作成した (Table 1-a 参照)。

これらの項目それぞれについて、「この6ヵ月間」の自分の家族の様子にあてはまるかどうかを、4点尺度で評定させた (「4.かなりあてはまる」～「1.ほとんどあてはまらない」)。家族と離れて暮らしている場合には、電話などを通じた日常の接触や帰省時の様子を想起させた。

2. アダルト・チルドレン傾向尺度

「アダルト・チルドレン」とは、もともと幼年時代にアルコール依存症者がいる家族で心的外傷を負った成人を指す概念であるが (Woititz, 1983)、機能不全家族で育った大人にも拡大される (諸井, 2003参照)。本研究では、Woititz (1983) が整理した狭義の「アダルト・チルドレン」の特徴に一般健常青年がどの程度あてはまるかを測定した。

Woititz が挙げた13個の特徴を、次のようにして尺度項目化した。①ダブル・ワーディングを避ける、②極端な表現を避ける。この結果、18項目が作成された (Table 1-b 参照)。これらの項目それぞれについて、「この6ヵ月間」のまわりとの人間関係や自分の気持ちにあてはまるかどうかを、4点尺度で評定させた (「4.かなりあてはまる」～「1.ほとんどあてはまらない」)。

3. 自尊心尺度

自分に対する全体的な肯定的評価の程度を測定するために、Rosenberg (1979) の自尊心尺度を用いた。先行研究 (諸井, 1995) で既に使用した日本語版10項目それぞれについて (Table 1-c 参照)、「この6ヵ月」という基準で回答者にあてはまる程度を4点尺度で回答させた (「4.かなりあてはまる」～「1.ほとんどあてはまらない」)。自尊心が高いほど、高得点になるようにした。

Ⅲ. 結果

尺度の検討

家族機能認知尺度およびアダルト・チルドレン傾向尺度については、各尺度の内部構造を検討するために、主成分分析（プロマックス回転 $\langle k=3 \rangle$ ）を行った。まず、項目平均値の偏り（ $1.5 < m < 3.5$ ）と標準偏差値（ $SD > .60$ ）のチェックを行い、不適切な項目を除去した。次に、残りの項目を対象に主成分分析を行った。

初期主成分固有値 ≥ 1.000 を満たす解をすべて求め、プロマックス回転後の負荷量 $|.400|$ を基準に妥当な主成分解を同定した。①特定主成分の負荷量が十分に大きく

($\geq |.400|$)、②他主成分への負荷が小さい ($< |.400|$) という基準に一致しない項目を除き再度分析を行い、明確な負荷量パターンが得られるまで、このことを繰り返した。最終的には、各主成分分析で回帰法によって主成分得点を算出した。

自尊心尺度については、単一次元性が確認されているので（諸井, 1995など）、主成分分析による確認を行い、主成分得点を求めた。

1. 家族機能認知尺度

4項目が項目水準の検討で不適切であったので、残りの47項目を主成分分析の対象とした。2~12主成分解が検討され、3主成分解が最も解釈可能であった。Table 1-a に

Table 1-a 家族機能認知尺度に関する主成分分析（プロマックス回転 $\langle k=3 \rangle$ ）の結果—プロマックス回転後の主成分負荷量—

	I	II	III
〔家族の絆〕			
fam_c_5 私の家族は、お互いに仲がよい。	.782	-.041	-.091
fam_c_9 家族がそろると、なんとなく重苦しい気分になる。	-.744	.188	.279
fam_d_1 私の家族は、温かくて明るい感じがする。	.703	.029	-.191
fam_e_8 私の家族は、てんでばらばらである。	-.701	-.057	.164
fam_a_9 私の家族は、一緒に何かをするのが好きである。	.691	.079	.165
fam_a_10 私の家族には、違和感がある。	.691	.143	.058
fam_c_10 私の家族では、家族が共に過ごせる時間があるときでも別々に過ごす。	-.657	.070	-.036
fam_b_4 私の家族では、家族と一緒にいることは、大切ではない。	-.625	-.086	-.118
fam_e_1 私の家族の雰囲気は、私が望むものとは違う。	-.601	.017	.329
fam_b_9 私の家族は、休日でも、家族と一緒にいることが少ない。	-.591	-.060	-.086
fam_c_6 私の家族は、私の大学生活の様子を知りたがる。	.505	-.050	.090
fam_b_6 私の家族では、家族での約束や予定が大事にされる。	.455	.170	.349
fam_c_3 私の家族は、お互いに充分な関心をもって接している。	.435	.369	.027
fam_d_2 私の家族は、私心のよりどころにできる場所である。	.423	.284	-.166
fam_a_7 私の家族では、大掃除など、一緒に何かするときには、みんなが参加する。	.410	.117	.160
〔意思疎通〕			
fam_c_1 私の家族は、私が言っていることを正確に理解する。	-.085	.690	-.153
fam_a_4 私は、問題が起こったときには、いつも家族を頼りにする。	.031	.630	.158
fam_b_3 私の家族では、話し合いをするとき、私の意見も聞いてもらえる。	-.120	.588	-.157
fam_e_7 友だちについての悩みなどを、家族の誰にも相談できない。	-.057	-.543	.069
fam_a_2 私の家族は、私の気持ちをあまり理解してくれない。	-.152	-.538	.311
fam_a_1 私の家族は、困ったことがあったときには、お互いに助け合う。	.231	.535	.033
fam_d_8 私の家族では、なんでも話し合いをして決める。	.267	.506	.097
fam_d_11 私が悪いことをしたときには、親はなぜよくないことなのかを説明する。	.157	.487	.121
fam_d_7 私の家族は、お互いの意志を尊重する。	.125	.480	-.320
fam_b_2 私の家族では、家族の誰かの様子がふだんと違うと、声をかける。	.247	.403	.150
〔固定化した役割〕			
fam_e_6 私の家族では、家のきまりを変えることが難しい。	-.017	.059	.723
fam_e_3 私の家族では、きまりを守ることがとても大切にされている。	.243	.128	.645
fam_e_2 ちょっと失敗しただけでも、親に厳しく叱られる。	.088	-.058	.639
fam_d_10 私の家族では、いったん役割が決まると、後でそれを変えるのは難しい。	-.144	.000	.569
fam_d_9 自分のやろうとすることが、家族に妨げられている感じがすることがある。	.056	-.363	.551
fam_a_3 私の家族には、しっかりとしたきまりはない。	-.139	-.206	-.548
fam_a_5 私の家族では、誰か1人が、ほとんどのことを決めている。	-.156	-.006	.474
fam_c_7 私の家族では、家のきまりなどについて、私の言い分を聞いてもらえない。	.000	-.363	.458
fam_d_3 私の家族では、私の進路を私が決めることができる。	.110	-.319	.447
〔主成分間相関〕			
	I	.592	-.133
	II		-.237
〔残余項目〕			
fam_a_6 私の家族では、何を行うかによって取り組み方を変える。			
fam_a_8 私の家族では、話し合いをしてもなかなかうまくまとまらない。			
fam_b_1 私の家族は、家族のそれぞれの友達や、知り合いのことをあまり知らない。			
fam_b_5 私が何かで苦労しているときでも、私の家族は私を励ますことがない。a			
fam_b_7 私が悪いことをしたときでも、親が私を叱ることは少ない。a			
fam_b_8 私の家族では、家族の誕生日や年齢をお互いに知っている。c			
fam_b_10 私の家族では、家の仕事のどれを誰がするかは決まっていない。			
fam_b_11 私が病気になるっても、家族の誰も看病してくれない。bd			
fam_c_2 家族で決めたことはみんなを守る。			
fam_c_4 遊びに行くときは絶対ではないが、親に行き先を告げることにしている。			
fam_c_8 家族の問題が解決したと思っても、すぐまた同じ問題が起きることがある。			
fam_c_11 私の家族では、私のことは、最後には私が決める。			
fam_d_4 私の家族では、家族の中心が誰であるかははっきりしない。			
fam_d_5 私の家族は、おやつや夜食を出してくれる。			
fam_d_6 私の家族では、いつも食事を作ってくれる人が食事を作れないときは、他の誰かが作る。			
fam_e_4 私の家族では、何に取り組むかによって中心になる人が変わる。			
fam_e_5 私の家族では、みんなが自分の気持ちをはっきりと口に出すことができる。			

N=179

初期固有値>1.928; 初期説明率:48.64%

a: 平均値=1.5; b: 平均値<1.5; c: 平均値=3.5; d: 標準偏差値<.60

は、最終的な主成分分析の結果を示した。第Ⅰ主成分に負荷が高い項目は、家族成員間の心理・社会的距離を表す項目から構成されているので、「家族の絆」と命名した。家族成員間の心理的交流に関する項目の負荷が高い第Ⅱ主成分は、「意思疎通」と名づけた。第Ⅲ主成分では、家族状況や成員の変化に対する柔軟性を表す項目の負荷が高く、主成分の正負を考慮して「固定化した舵取り」とした。

2. アダルト・チルドレン傾向尺度

項目水準の検討ではすべての項目が適切であった。18項目に関する主成分分析では2~6主成分分解が検討可能であった。3主成分分解が最も明確な負荷量パターンを示した。最終的な主成分分析の結果を Table 1-b に表す。第Ⅰ主成分

は、自責感や状況に直面するときの自信のなさを表す項目での負荷が高いので、「自信の欠如」と名づけた。第Ⅱ主成分に負荷が高い項目は、自分に対する適切な統制ができないことを示しているため、この主成分は「統制感の欠如」とした。第Ⅲ主成分では回りの人々との乖離を意味する項目の負荷量が高いので、「対人的不調和」と呼ぶ。

3. 自尊心尺度

項目水準の検討で10項目すべてが適切な結果を示した。10項目について主成分分析を行い、未回転主成分負荷量を検討したが、1項目の負荷が低かった (<.400)。残りの9項目で再度分析を行うと、良好な結果が得られた。これを Table 1-c に示す。

Table 1-b アダルト・チルドレン傾向に関する主成分分析（プロマックス回転 $k=3$ ）の結果—プロマックス回転後の負荷量—

	I	II	III
【自信の欠如】			
ac_a_5 私は、厳しく自分を責めることがある。	.749	.106	-.050
ac_a_8 私は、あらゆる状況において真面目すぎる。	.699	-.188	-.036
ac_a_1 私は、何が普通で、何が異常であるかを、ついつい考えがちになる。	.627	.025	.057
ac_b_3 私は、自己嫌悪に陥りやすい。	.594	.254	.077
ac_a_2 私は、自分ではどうすることもできない変化に対して過剰に反応する。	.468	.332	.112
【統制感の欠如】			
ac_b_8 私は、混乱しやすい。	.213	.715	-.128
ac_b_7 私は、一つの行動に突っ走りやすい。	-.004	.633	-.192
ac_a_4 私は、ささいなことにでも嘘をつくことが多い。	-.146	.611	.264
ac_a_3 私は、自分が取り組もうとしたことを最初から最後までやり遂げることが困難なほうである。	-.161	.551	.283
ac_b_5 私は、自分で自分がコントロールできなくなる。	.236	.521	.198
ac_a_7 私は、まわりの人から認められることを常に求める。	.323	.436	-.150
【対人的不調和】			
ac_a_9 私は、まわりの人と親しい関係を維持しにくい。	.192	-.107	.804
ac_b_1 私は、自分が他人と一緒にいて違和感を抱く。	.384	-.090	.656
ac_b_4 私は、あらゆる人間関係に対して、かなり誠意をもって接する。	.390	-.125	-.637
【主成分間相関】			
	I	.364	.190
	II		.259
【残余項目】			
ac_a_6 私は、あらゆる状況において純粋に楽しむことがなかなかできない。			
ac_b_2 私は、自分がおかれた状況に対して、自分にどのくらいの責任があるかをなかなか判断できない。			
ac_b_6 私は、不都合な人間関係であっても、その関係を維持しようとする。			
ac_b_9 私は、自ら引き起こしたトラブルを必死になって解決しようとする。			
N=179 初期固有値>1.236；初期説明率：50.65%			

Table 1-c 自尊心尺度に関する主成分分析の結果—未回転第Ⅰ主成分負荷量—

	I
se_a_2 私は、ときどき、自分にはまったくよいところがないと思う。	-.775
se_b_3 私は、全体として、自分が人生の失敗者だと思いがちである。	-.754
se_a_4 私は、自分には自慢できるものがあまりないと感じる。	-.754
se_b_4 私は、自分自身に対して前向きな態度をとっている。	.739
se_a_5 私は、ときどき、自分が役立たずだとはっきりと感じる。	-.723
se_b_1 私は、自分は少なくとも他の人と同じぐらいの価値がある人間だと思う。	.693
se_a_1 私は、全体として、自分自身に満足している。	.688
se_a_6 私は、ときどき、自分にはよいところがたくさんあると感じる。	.671
se_a_3 私は、たいいていの人と同じくらいには、だいたいのことをうまく行える。	.639
【残余項目】	
se_b_2 私は、もっと自分を尊敬できたらと思う。	
N=179 初期固有値>4.617；初期説明率：51.30%	

家族機能認知，アダルト・チルドレン傾向，および自尊心の関係

3通りの方法（ピアソン相関分析，偏相関分析，共分散構造分析）によって，家族機能認知，アダルト・チルドレン傾向，および自尊心の関連を検討した。

1. 相関分析

①家族機能認知およびアダルト・チルドレン傾向と自尊心との関係

Table 2-aには，家族機能認知3主成分得点およびアダルト・チルドレン傾向3主成分得点と自尊心主成分得点とのピアソン相関値を示した。家族機能認知では，「家族の絆」と「意思疎通」は自尊心と有意な正の相関を見せたが，

Table 2-a 家族機能認知およびアダルト・チルドレン傾向と自尊心との関係－主成分得点間のピアソン相関値－

	自尊心
家族の絆	.321
	<i>p</i> =.001
意思疎通	.260
	<i>p</i> =.001
固定化した舵取り	-.031
<hr/>	
自信の欠如	-.420
	<i>p</i> =.001
統制感の欠如	-.315
	<i>p</i> =.001
対人的不調和	-.395
	<i>p</i> =.001

N=179

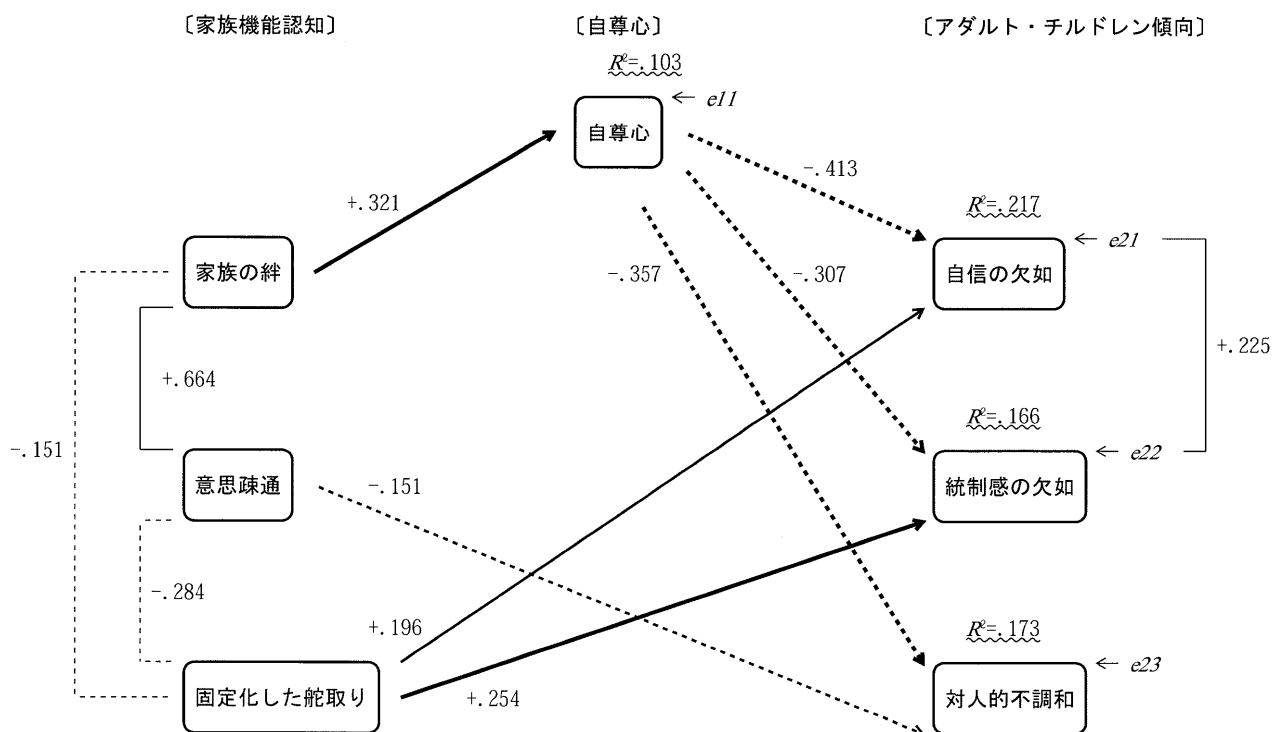
Table 2-b 家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向との関係－主成分得点間の偏相関値－

	自信の欠如	統制感の欠如	対人的不調和
家族の絆	0.070	0.013	-0.068
			<i>p</i> =.013
意思疎通	-0.075	-0.090	-0.186
			<i>p</i> =.035
固定化した舵取り	-0.151	-0.191	-0.243
	<i>p</i> =.044	<i>p</i> =.001	<i>p</i> =.001
	0.216	0.267	0.059
	<i>p</i> =.004	<i>p</i> =.001	
	0.209	0.263	0.067
	<i>p</i> =.005	<i>p</i> =.001	

N=179

上段：偏相関値（自尊心主成分得点を統制）

下段：ピアソン相関値



矢印：標準化パス係数[有意水準：すべて *p* < .05]

[モデル適合度] $\chi^2_{(10)}=9.155, p=.517; GFF=.985, AGFF=.959, RMR=.033$

Fig.1 家族機能認知，自尊心，およびアダルト・チルドレン傾向の関連－観測変数の構造方程式（Amos5.0，最尤推定法）による因果分析（N=179）－

「固定化した舵取り」は無関連であった。また、アダルト・チルドレン傾向の場合には、3主成分得点すべてで自尊心との間に有意な負の相関が得られた。

②家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向との関係

家族機能認知とアダルト・チルドレン傾向との関係については、まずピアソン相関値を求め、①の結果を考慮して自尊心主成分得点を統制変数とする偏相関分析も試みた。これらの結果を Table 2-b に表す。

偏相関分析によると、「家族の絆」はアダルト・チルドレン傾向との直接関係は見られない。興味深いことに、「意思疎通」は「対人的不調和」と有意な負の関係、「固定化した舵取り」は「自信の欠如」と「統制感の欠如」で有意な正の関係を示した。

2. 共分散構造分析

Amos5.0を利用して「家族機能認知→自尊心→アダルト・チルドレン傾向」の構図に関する分析を行った。ここでは、観測変数の構造方程式（最尤推定法；豊田，1998）の分析を試みた。まず、先のピアソン相関分析や偏相関分析（Table 2-a, 2-b 参照）によって有意な関係が得られた変数間にパスを設定したモデルを作成した。その上で Amos5.0 を実施した。パス係数が5%水準で有意であることを基準にして、修正指数を参考にしながら、十分な適合度が得られるまで分析を繰り返した。最終的に到達したモデルを Fig.1 に表す ($GFI=.985$, $AGFI=.959$, $X^2_{(10)}=9.155$, $p=.517$; $RMR=.033$)。

IV. 考察

本研究の目的は、Woititz (1983) によって臨床概念として確立された「アダルト・チルドレン」を一般的傾向として捉え、家族機能認知との関連を探ることであった。Woititzが挙げた「アダルト・チルドレン」の特徴に沿って一般健常者にも適用可能なアダルト・チルドレン傾向尺度を作成した。

主成分分析によって、「自信の欠如」、「統制感の欠如」、および「対人的不調和」の3側面が得られた。これは、Woititzが指摘する特徴の基底に、自尊心の低下を背景として、まわりの人々としっくり行かず、自分を取り巻く状況に対する統制感も希薄である「生きにくさ」（斎藤，1996）や「生きづらさ」（信田，1996）があることを示しているといえる。本研究では、健常女子青年を対象としたが、尺度として理解可能な側面が抽出されたことは、「アダルト・チルドレン」概念がまさに信田（1996）が指摘す

るように「自己認知の問題」であり、一般化可能であることを示唆している。

家族機能認知の測定には、Olson (1986; 立木,1999参照) が提唱した円環モデルのために開発された尺度次元を参考に尺度項目を作成した。主成分分析の結果、想定通りに、家族成員間の心理・社会的距離を意味する「家族の絆」、家族成員間の心理的交流を示す「意思疎通」、家族状況や成員の変化に対する柔軟性のなさを表す「固定化した舵取り」の3側面が抽出された。これらの3側面とアダルト・チルドレン傾向との関係を偏相関分析や共分散構造分析によって検討した。その結果、家族機能認知の3側面とアダルト・チルドレン傾向3側面との自尊心を媒介変数とした弁別関係が認められた。

共分散構造分析の結果 (Fig.1) は、次のような構図を明らかにした。「家族の絆」は自尊心を媒介として「自信の欠如」、「統制感の欠如」、および「対人的不調和」の3側面すべてに影響をおよぼしていた。「家族の絆」とこれらの側面との直接的な影響関係はなかった。ところが、「意思疎通」と「固定化した舵取り」は、自尊心を媒介せずに「アダルト・チルドレン」3側面に直接的に影響していた。「意思疎通」は「対人的不調和」への負の影響、「固定化した舵取り」は、「自信の欠如」と「統制感の欠如」に対する正の影響を示した。

これらの傾向は次のように解釈できよう。家族間の凝集力の高さは、自分自身に対する肯定的評価の育みをもたらすし、それがアダルト・チルドレン傾向を抑制するのである。絆が希薄な家族状態が直接に不全症候を発生させるわけではない。柔軟性に乏しい家族関係は、状況に対する柔軟性も喪失させる。変化する状況に対して、自分の判断に確信がもてず、成り行きにまかせることになる。また、Olson (1986) が提唱する第3の家族機能次元については、家族成員間のコミュニケーションが円滑に行われないと、一般的に親密な関係形成に困難を生じることになる。もともと家族が親密感の基本的源泉であるとするれば、そこでの不全は、親密な関係が築けないという一般的な対人関係上のリスク感を孕むということである。

なお、Olson (1986) の円環モデルでは、家族機能と心理的適応との間に2次的関係が仮定されている。そこで、家族機能認知3主成分得点の二乗値を算出し、アダルト・チルドレン傾向や自尊心との関係を見たが、「固定化した舵取り」主成分得点の二乗値と「自信の欠如」との間に有意な相関が認められたにすぎなかった ($r=.173$, $p=.020$)。したがって、変数間の直線的関係を仮定して分析を行った

本研究の方法は一応妥当といえるが、円環モデルの俎上へのせた分析も今後必要といえる。

ところで、本研究で測定した回答者が認知している家族機能は、幼少体験ではなく、現在の家族体験に基づいている。もともと Woititz (1983) による「アダルト・チルドレン」概念の提起は、幼少期の特異な家族体験が基礎となっている。本研究では、現在の家族体験に関する認知がアダルト・チルドレン傾向に有意な影響をもつことが実証された。したがって、以下の点を今後検討することが重要となる。①「過去の家族体験→現在の家族体験」の影響構図を明確にする、②これらの影響構図に現時点の不全症候といえるアダルト・チルドレン傾向がどのように組み込まれ得るかを検討する。

本研究で依拠した円環モデル (Olson, 1986; 立木, 1999 参照) や「アダルト・チルドレン」概念 (Woititz, 1983) は、そもそも治療枠組みの中で提出されたものである。現在では親子や家族の力動的関係での治療実践理論が多く提出されている (Hoffman, 1981 参照)。したがって、他の家族療法理論による考えも取り込みながら、先述した今後の検討課題に取り組むべきであろう。

〈付記〉

- (1) 本研究は、芳我知恵・池野麗・岩坂弘美・北出由梨・三笠美紀 (同志社女子大学現代社会学部・社会システム学科2005年度卒業) の諸姉が筆者の下で取り組んだ卒業研究に基づいている。彼らが収集したデータを筆者が再分析した。本研究で得られた成果は、卒業研究で彼らが示した熱意の賜物である。
- (2) 本論文作成にあたり、科学研究費補助金 (基盤研究C「親子関係認知に関する家族社会心理学的研究〈課題番号19530569〉」〈代表: 諸井克英〉) を利用した。
- (3) データの統計的解析には、SPSS15.0J for Windows および Amos5.0 を利用した。
- (4) E-Mail: kmoroi@mail.dwc.doshisha.ac.jp

V. 引用文献

Donaldson-Pressman, S., & Pressman, R.M. 1994 *The narcissitic family: Diagnosis and treatment*. Lexington Books. 岡堂哲雄 (監訳) 『自己愛家族—アダルトチャイルドを生むシステム—』 1997 金剛出版

Gubrium, J.F., & Holstein, J.A. 1990 *What is family?* Mayfield Publishing Company. 中河伸俊・湯川純幸・鮎川 潤 (訳) 『家族とは何か—その言説と現実—』

1997 新曜社

Hoffman, L. 1981 *Foundations of family therapy*. Basic Books, Inc. 亀口憲治 (訳) 『家族療法の基礎理論—創始者と主要なアプローチ—』 2006 朝日出版社

磯野理香 2002 大島弓子少女マンガ論—「ダイエットに描かれたアダルト・チルドレン」— 梅花児童文学, 10, 135-149.

国立社会保障・人口問題研究所 (編) 2007 『現代日本の家族変動—第3回全国家庭動向調査— (2003年社会保障・人口問題基本調査)』 財団法人厚生統計協会

諸井克英 1995 成人女性における電話による社会的支援と心理学的健康 社会心理学研究, 11, 51-62.

茂木千明 1994 家族機能測定に関する研究—家族円環モデルと日本語版FACESⅢの関連性について— 家族心理学研究, 8(2), 95-108.

新山悦子・塚原貴子・笹野友寿 2005 看護学生のアダルトチルドレン特性とバーンアウト症候群との関連 川崎医療福祉学会誌, 15(1), 117-122.

荷宮和子 1997 『アダルトチルドレンと少女漫画—人並みにやってこれた女の子達へ—』 廣済堂

西出隆紀 1993 家族アセスメントインベントリーの作成—家族システム機能の測定— 家族心理学研究, 7(1), 53-65.

信田さよ子 1996 『「アダルト・チルドレン」完全理解—一人ひとり楽にいこう—』 三五館

緒方明 1996 『アダルトチルドレンと共存』 誠信書房

Olson, D.H. 1986 Circumplex model VII: Validation studies and FACES III. *Family Process*, 25, 337-351.

Olson, D.H., Sprenkle, D.H., & Russell, C.S. 1979 Circumplex model of marital and family systems: I. Cohesion and adaptability dimensions, family types, and clinical applications. *Family Process*, 18, 3-28.

Rosengerg, M. 1979 *Conceiving the self*. Basic Books.

斎藤 学 1996 『アダルト・チルドレンと家族—心のなかの子どもを癒す—』 学陽書房

貞木隆志・榎野 潤・岡田弘司 1992 家族機能と精神的健康—OlsonのFACESⅢを用いての実証的検討— 心理臨床学研究, 10(2), 74-79.

笹野友寿・塚原貴子 1998 大学生の精神保健に関する研究—機能不全家族とアダルト・チルドレン— 川崎医療福祉学会誌, 8(1), 47-53.

渋谷敦司 1999 家族へのまなざしと家族問題論—アダルト・チルドレン言説をめぐって— 家族研究年報, 24,

2-8.

- 杉浦暁子 1998 高校生における食態度と心理学的健康
－家族関係との関連を中心として－平成10年度静岡
大学大学院人文社会科学部研究科比較地域専攻修士論文
(未公刊).
- 立木茂雄 1999 『家族システムの理論的・実証的研究
－オルソンの円環モデル妥当性の検討－』 川島書店
- 豊田秀樹 1998 『共分散構造分析入門 [入門編]－構造
方程式モデリング－』 朝倉書店
- 塚原貴子・新山悦子・笹野友寿 2005 アダルト・チルド
レン特性と対人関係でのストレスの自覚－看護学生と他
学科学生との比較－川崎医療福祉学会誌, 15(1), 95-101.
- Woititz J.G. 1983 *Adult children of alcoholics:
Expanded edition*. Health Communication, Inc. 斎
藤学 (監訳) 『アダルト・チルドレン－アルコール問題
家族で育った子供たち－』 1997 金剛出版
- Woititz, J.G. 1993 *The intimacy struggle. The Right
Agency*. 新沢ひろ子 (訳) 『なぜいつも、あなたの恋愛
はうまくいかないのか－アダルト・チルドレンの恋愛と
結婚の神話－』 1999 学陽書房